

## 今昔館の近代展示室を愉しむ(3)

前回は、天神祭の開催時期に合わせて、天神祭の模型をご紹介しました。今回からは、住まいの大阪六景を順番に取り上げていきましょう。今回は、まず8階展示室に入って左手前の「川口居留地—文明開化と西洋館—」についてみていくことにしましょう。



川口居留地—文明開化と西洋館—(住まいの大阪六景)

### ■川口居留地の開設

大阪は慶応3年12月7日(1868年1月1日)に開市、翌4年7月15日(1868年9月1日)に開港となり、外国人が大阪に住めるようになりましたが、その場所は、居留地とそれに接続する雑居地(外国人が日本人の家屋を借りて住むことが認められた地域)に限られていました。

川口居留地は、慶応4年(1868)の大阪開港に伴い、安治川と木津川に挟まれた弾丸型の土地に作られました。26区画、7746.5坪が競売され、5日前の神戸居留地を上回る高値で、イギリス人、アメリカ人、ドイツ人、フランス人、オランダ人が永代借地権を得ました。しかし、貿易の窓口としての川口居留地の繁栄は短く、貿易の中心はただいに神戸に移りました。貿易商人に代わって居留地に入ってきたのは宣教師たちでした。川口はキリスト教伝道の拠点として再出発したのでした。

道路には歩道、街路樹、街灯が整備されて、西洋館が立ち並び、西洋式の生活様式に求められる施設が周辺に数多く生まれ、文明開化そのものであり、大阪における西洋文化の窓口でした。川口居留地は、英国との間で不平等条約が改正され、国内の居留地が撤廃されることになる明治32年7月まで存続していました。この模型は、聖三一教会(3番館・右奥)を中心に明治10年(1877)頃の川口居留地を1/50のスケールで再現しています。

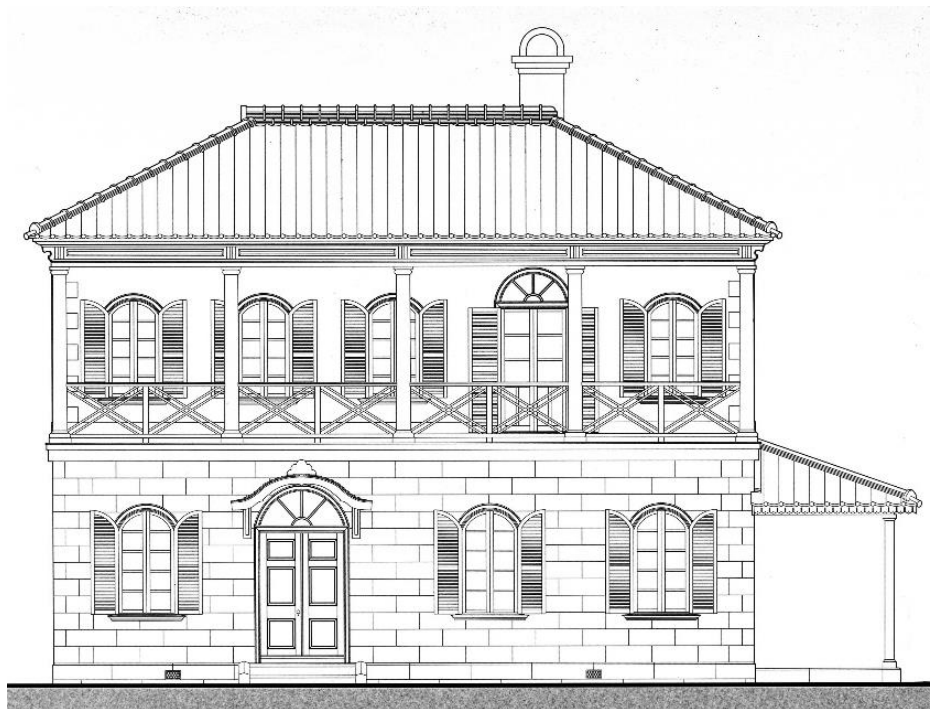
## ■「近代都市住宅年表」の立面図

8階展示室の壁面に展示している「近代都市住宅年表」は、明治以降から現代までの大阪の住まいと暮らしの歴史を、「都市住宅の変容」を軸に、市街地や郊外居住の変化などの流れも含めて年表にまとめたものです。



8階近代のフロアの「近代都市住宅年表」のコーナー

この年表の下段には近代の各時代の代表的な住宅の立面図が同じスケールで描かれています。その中に川口居留地4番館甲オックスラド邸の立面図が描かれています。2階にベランダのあるコロニアルスタイルの建物で、1階は漆喰壁、2階は下見板壁、2階の壁にはコーナーストーンを模した意匠がつけられています。この建物は、プール学院の前身と言われています。川口からは、このほか、桃山学院、梅花学園、大阪女学院、平安女学院、信愛女学校などの多くの学校や聖バルナバ病院などが誕生しています。模型写真もよくご覧ください。



川口居留地4番館甲オックスラド邸立面図





川口居留地4番館甲オックスラド邸模型



聖三一教会模型





聖三一教会(手前)とファーブル・プラント商会模型

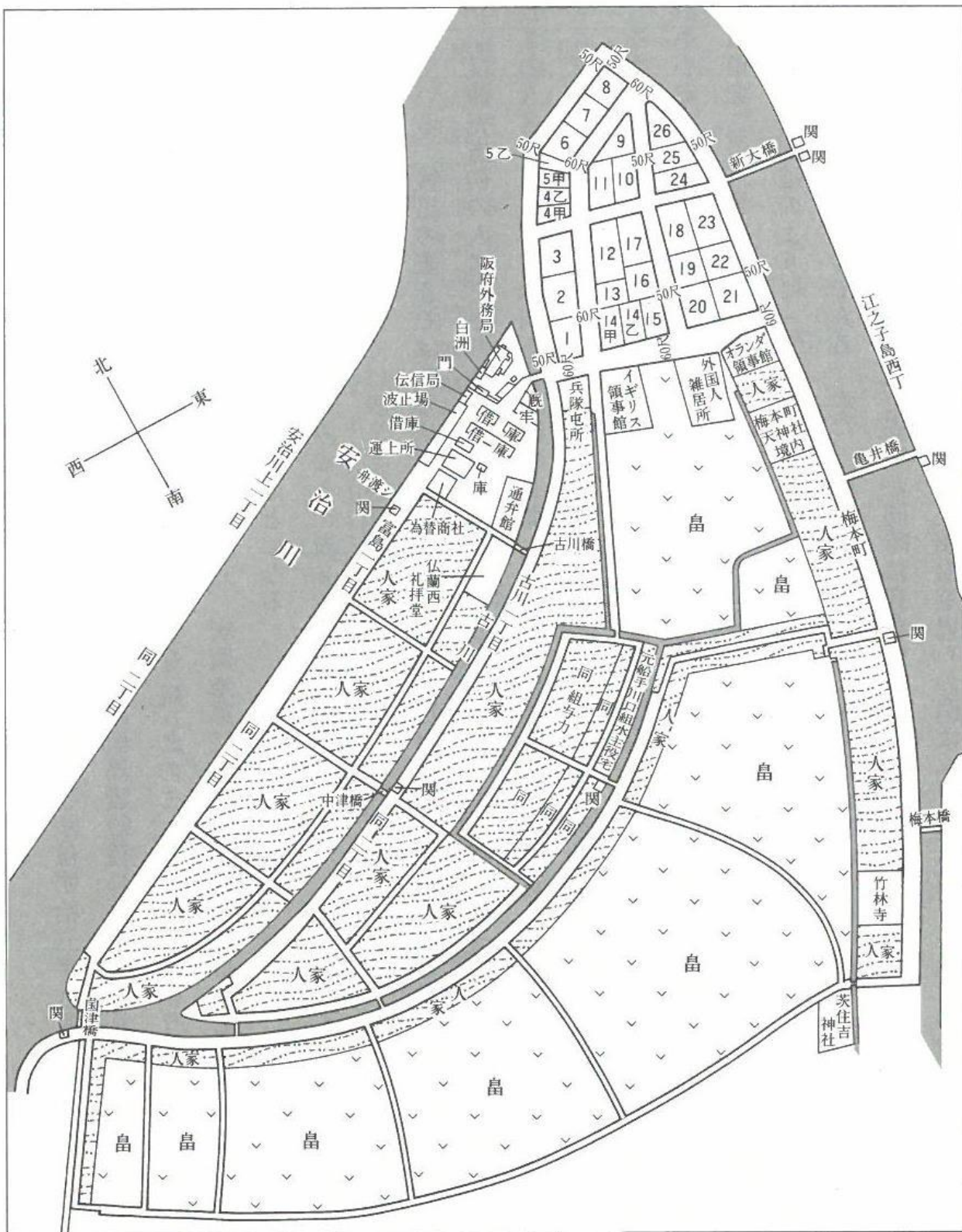


居留地 3 番館ワレン邸模型



■外国人居留地の区画割

「大阪外国人居留地の図」を見ると、戎島の北端部、弾丸型の部分が居留地として整地され、1番から26番までに区画割されています。4番、5番、14番はそれぞれ甲乙に分割されています。居留地の南側には、イギリス領事館、オランダ領事館、外国人雑居所があります。さらに南には、梅本町天神社境内があります。



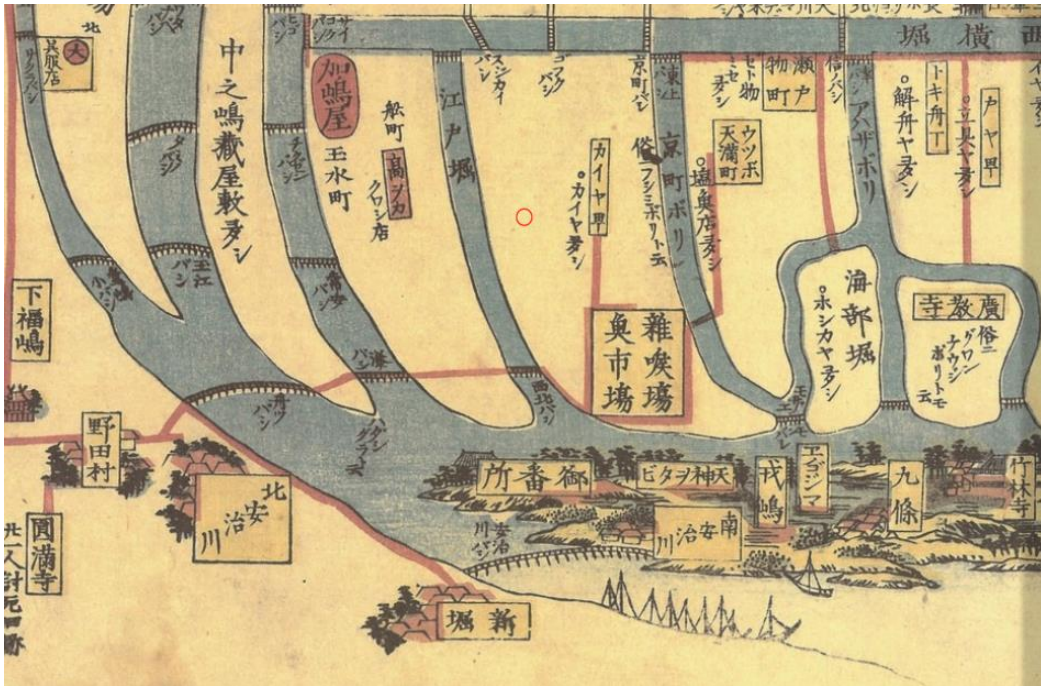
「大阪外国人居留地の図」(「大阪川口居留地の研究」より)



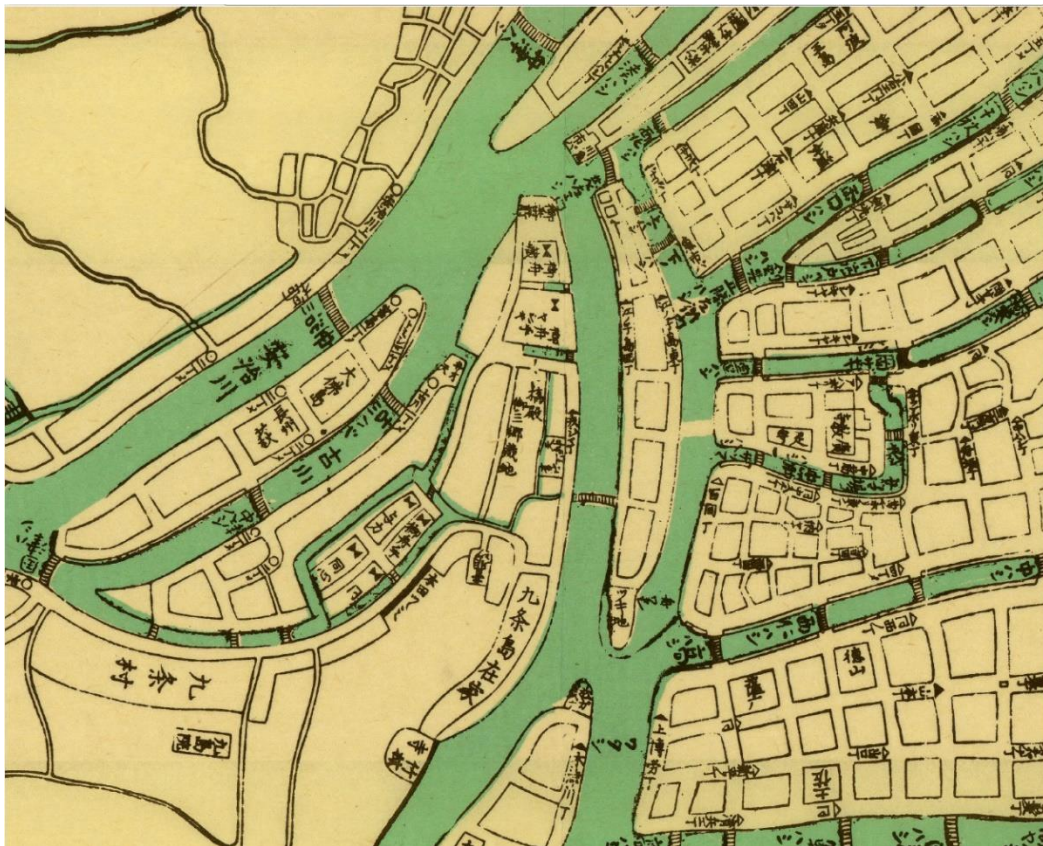
■ 居留地ができる以前の川口

居留地ができる以前の川口付近の様子を江戸時代の古地図で見てください。

「浪華名所獨案内」(「津の清」蔵)では、中之島の南西、雑魚場魚市場の対岸の島に、御番所、天神ヲタビ、南安治川、戎島、エノゴジマ、九條、竹林寺といった文字があります。



「浪華名所獨案内」の川口付近(「津の清」蔵)(上が東になっています)



「天保新改撰州大坂全図」の川口付近(日文研蔵)



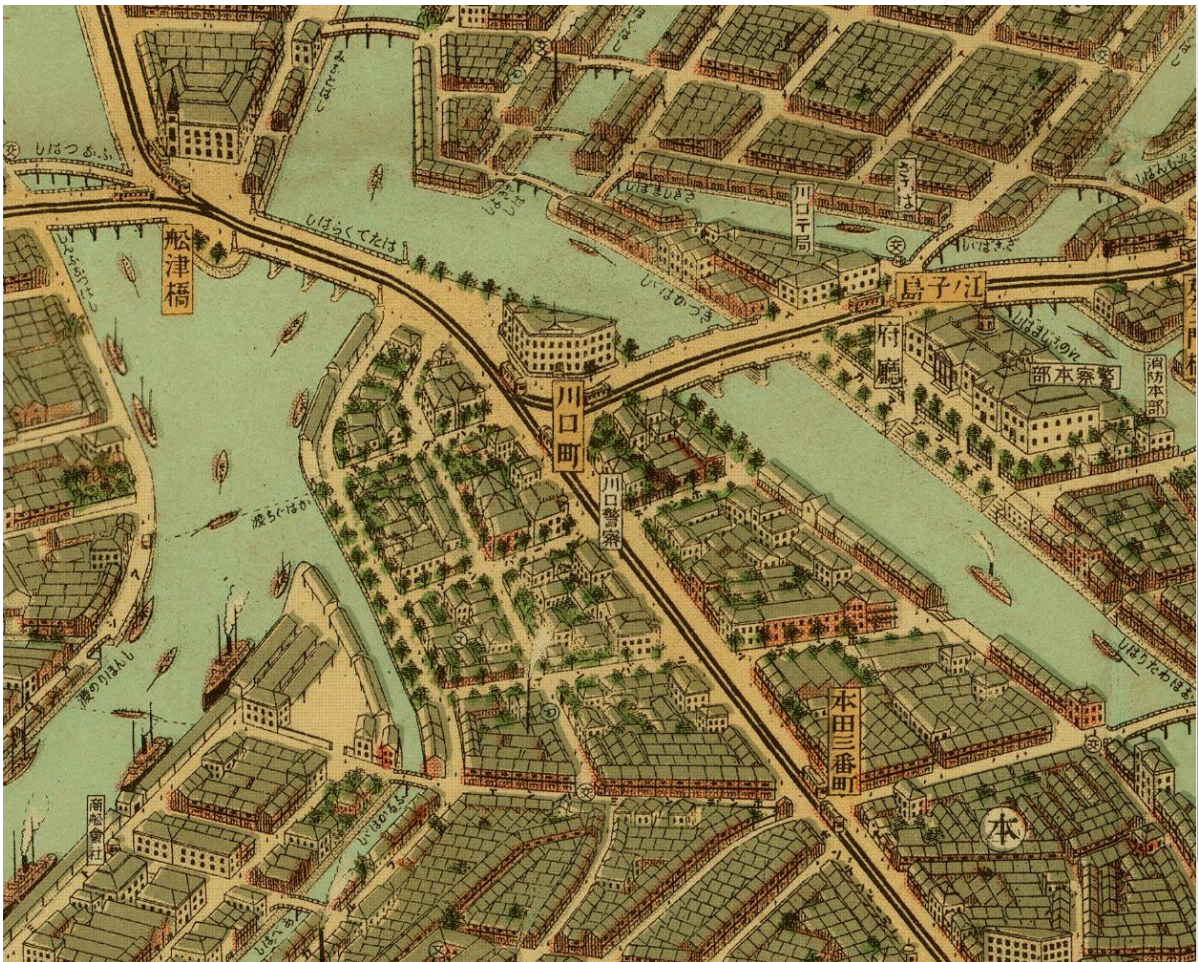
「天保新改摂州大坂全図」(国際日本文化研究センター蔵)では、川や道路が詳しく描かれ、江之子島や戎島、大仏島などが描かれ、戎島には、御番所、御舟蔵、御舟手ヤシキ、与力、同心があり、幕府の重要拠点であったことがわかります。

前回、天満宮の御旅所について、「かつては川口の近くにあったが、戎島付近が外国人居留地になったこともあって、明治5年の船渡御の復興の際には、従来の戎島から御旅所が松島に移転された」ことをご紹介しました。改めて、地図で確認すると、「浪華名所獨案内」では御番所の南に天神ヲタビがあり、「摂州大坂全図」では、御番所、御舟蔵、御舟手ヤシキの南、御三郷蔵地の東に天神御旅所が描かれています。「大阪外国人居留地の図」では、居留地の南に、オランダ領事館、人家をはさんで、梅本町天神社境内とあります。

このように、天満宮の御旅所は居留地に近い梅本町にありましたが、明治5年2月に松島花園町に移転しました。移転の理由は、祭礼時に外国人に対して不測の事態があってはならないという届けになっているようですが、天満宮の関係者にとっては、牛は天満天神の使いとされ、御旅所の近くで牛肉料理が出されることに抵抗があったためともいわれているそうです。

### ■居留地撤廃以降の川口

最後に、居留地が撤廃された以降の川口の様子を「大阪市パノラマ地図」(大正13年、大阪くらしの今昔館蔵)で見てください。中之島から渡ってきた市電が川口を南北に貫き、本町通りから江之子島を経て川口に入ってくる東西線と連絡するところに「川口町」の停留所があります。川口の街並みは、周辺の住宅地と比べると敷地が大きく緑が豊富に描かれていて、居留地の名残りが残っています。対岸の江之子島には、府庁、警察本部、消防本部があって官庁街となっています。



「大阪市パノラマ地図」の川口付近(大正13年、大阪くらしの今昔館蔵)



川口と江之子島との間を流れる木津川の下流を見ると、木津川と尻無川に囲まれた松島があります。



「大阪市パノラマ地図」の川口～松島付近(大正13年、大阪くらしの今昔館蔵)

松島を拡大して見ると、南北に桜並木が描かれています。松島遊郭です。その南に、桜のある神社が描かれています。これが天満宮の御旅所です。東側には市電の「身襖橋」停留所もあります。



「大阪市パノラマ地図」の松島付近(大正13年、大阪くらしの今昔館蔵)



御旅所は現在もこの地にあり、今も毎年7月24日にここで行宮祭(神事)が催されています。天神祭総合情報サイトによると、「24日11:00~11:30、昭和24年まで渡御の目的地であった行宮(御旅所)にて行宮祭が行われる。寛永年間、京町堀川流末の地(後の雑喉場)に大阪天満宮の行宮が設定された。その後、行宮(御旅所)は寛文年間には雑喉場から戎島(西区本田)、さらには明治4年、松島(西区千代崎)へ移転。この行宮が設定されたことにより天神祭の船渡御は毎年行宮に向かうことになった。しかし、戦後、船渡御が復活した昭和28年以降は地盤沈下が原因で御旅所への渡御が取りやめとなり、大川上流へ遡るルートに変わって以降、毎年行宮祭が行われている。」とあります。

#### ■現在の川口

現在の川口には居留地の面影はほとんど残っていません。本田小学校の角に、川口居留地跡の石碑と、ライオンズクラブによって建てられた記念碑があります。記念碑には、居留地の主な施設図が刻まれていて、この地から誕生した学校などがわかります。



川口居留地跡の石碑と記念碑

また、居留地の撤廃後に建て替えられたものではありませんが、川口教会(1920年竣工)が当時の面影を伝えてくれています。



川口教会の外観

今回は、住まいの大阪六景のひとつ「川口居留地」をご紹介します。解説は、『大阪川口居留地の研究』(堀田暁生・西口忠共著)を参考にさせていただきました。